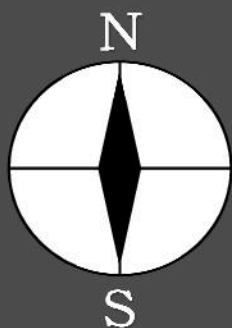




## II

# THREATENING SKY



## ファヴル大陸周辺地図

「クソツ、何てことだ。こんな当然の事にも気づかないなんて……」

ゲイで子持ちの中年小説家であるジグは、苦虫を噛み潰す。眉間に皺が寄り、眼鏡の奥の瞳が困惑した色に染まる。

旅の荷物が沢山入ったリュックサックがやけに重くのしかかり、肩へのベルトの食い込みがいつもより痛く感じられる。

短く刈り揃えられた銀髪を掻き毟る様に頭を抱えてしまふ。ジグ自身、こんなに不甲斐なさを感じるのは、締め切りを一月も間違えて遠出してしまい、原稿を落としてしまった時以来だ。

担当からは電話口で涙声の罵声を浴びせられ、ファンからは失望のメール攻撃を受け、マスコミからはあの手この手のパッシングを受けた。

まだ若かったゲイの心はズタズタになり、お盛んだった男同士の情事にも関心が無くなってしまった。

そんなこんなで気晴らしにドライブしていた先で出会ったのが、唯一恋に落ちた女性であり、既に亡くなった妻だつたりするが……それは別の話。

ジグの傍らには、最愛の妻との間に授かった愛娘のリファイがちよこんと立っており、不安そうな父の表情を覗き込んでいる。まだ直面している事態を呑み込めていないようで、声を掛けたそうに裾を引っ張ってくる。

「ねえねえ。パパ、どうしたの？」

「ん？……あ、ああゴメンなりファイ。ちよつと必要な事を今思い出ただけだよ」

「わすれもの？ だつたらお家に取りにかえろうよ。ひこうきにはのれるんでしょ」

まだ小学校にも行けない年齢の割には、しっかりとした意見を答える。左右にキチンと分けられ銀髪のツインテールも、リファイが自分で編んだものだ。

いつかのテレビ番組で見た情報で、父子家庭の娘は過

度に大人びてしまおうと言っていたと思う。成長にちよっ  
ぱり感動する反面どこか空しい。

頭上の電光掲示板をレンズ越しに見てから腕時計の針  
を確認する。予定されたフライト時間にはまだ余裕があ  
る。

目の前を通り過ぎていく乗客たちにも急ぐ気配は無  
い。通路は穏やかな雰囲気のまま人を流している。

確かに一度空港を出て自宅に戻っても何とかな間に合  
いそうではある。自宅から空港まで車で来たのだが、地  
方都市の中堅空港ゆえの人口密度の低さゆえか、途中の  
道路もスイスイ走れ、渋滞の気配も無かった。

寧ろ、見る物全てに視線を向けて興奮する『同乗者』  
の扱いに戸惑った。

あの嵐のようなドライブの記憶が、忌々しい程に全身  
が覚えてしまっている。

『すげーすげー!! なあなあジグ! ああのデケエ車輪みた  
いな何だ!?! おお!! 自転車がこの『じどうしゃ』と同

じスピード出してんぞ!! お、おとおおっ?! なんだあの  
鉄のドラゴン! 黄色いしなんか動きガクガクだしカッケ  
ーけど弱そうじゃねーか!!』

『やめろやめろやーめーろー!!! 動いてる最中にドア開  
けんな!! あっ、シートベルト勝手に外しやがって早くつ  
ける!! ドラゴンじゃなて黄色いのはシヨベルカーだか  
ら! 後で説明するから早く席に戻れっの!!』

『ばばーみてみてー。しんごう赤になったよー』

『何っ!?! ぶぶ、ブレーキ……』

『お、今度は一つ目の長い棒だ!! おー! 青から黄色に:  
……って次が赤い!!』

『いいから落ち着け!! さっさと落ち着きやがれこんの  
自由人があっ!!! あっ、ブレーキ!! ブレエエエエエ  
エエキツ!!!』

……運転中に助手席から飛び出そうとするのを必死  
で制止し、コートの襟を破れんばかりに引つ張りながら  
ハンドル操作をし続けた。

喉が枯れんばかりに叫び、甲高いブレーキ音と向けられる罵声に鼓膜は破れてしまいそうになった。

ずれた眼鏡を戻す余裕などなく、微かな視界を頼りに空港に来たのは奇跡的だったかもしれない。

思わずその時の喧騒が脳内で蘇り頭痛を覚えてしまう。眩暈で足が本気でもつれそうになる。

必死にガンブを捕え続けた手は若干痺れ、暫くは上手く動かせない程だった。

「あんなのはもう嫌だ……。というか戻っても解決しないだよ。ごめんねリフィー」

「そうなの？」

だが、戻っても全く解決しない問題なのはジグ自身良く理解している。それどころか、飛行機が離陸するは愚かどんなに時間を掛けても解決しない問題である。

行き交う利用者の間に立ち竦み、その厄介すぎる問題に一人頭を抱えていると、その問題の張本人が何とも無邪気な様子で近付いて来る。

ピチピチになっているジグのお古のTシャツとジーン

ズを着用し、その上からは近所の古着屋で買ったばかりのロングコートを羽織っている。

無神経に大きな足音をドストス鳴らし、思考を巡らせているジグの繊細な神経を乱す。

「すげーすげーマジすげー!!なんか長い階段が勝手に動いてるしなんかデカイ箱が動いてるしなんかドラゴンみたいなデカイヤツが空飛んじゃってるし、ジグ!『クウコウ』ってマジすげーな!!」

ジグよりも遥かに大柄で筋骨隆々な顎鬚男が、満面の笑顔ではしゃぎながらまくしたてる。初めて見た空港の様子に喜んでいいのか、見た事聞いた事を脈絡も無く話し続ける。

その勢いのまま、反応を求めてジグの両肩を掴んで激しく揺らす。

ジグの頭が人形の頭のように派手に揺さぶられ、バランスが崩れそうになる。それがジグのイライラを更に加速させる。

「……お帰りガンブ君。嬉しそうで何よりだ」

「ただいまー！いやーマジ時代の流れってパネエ！！二千年経ったらこんな世の中変わっちゃうの？っていう位変貌してマジ笑ったわ。ほらほら早くあの首無しドラゴン中行こうぜ！！もう入れんだろ？リフィーちゃんも早く乗りたいだろ乗りたいよねー？」

車の中の悪夢がまさまじと蘇る。視界の端をバトカーが走り去って行ったのは流石に肝を冷やしたが、気付かずに行ってくれたのは不幸中の幸いだろう。

そんなジグを露知らず、ガンブはハイテンションのままリフィーにも会話を振るが、困ったように体を揺らすとそのまま首を傾けてしまう。

「うーん、パパといっしょならいいよ。でもパパわすれものしちゃったんだって。だからまたここでまってる」

「えーマジ？なあジグ、何時までそんなに悩んでんだよ。もう一時間位立ちっぱなしじゃねえか。チンポだってそんな勃ってたら萎えっ」

さりげなく押し込まれた下ネタを遮るように、ガンブの頬を振る様に強く抓む。

無駄に整えられた顎髭の一部が指先に軽く刺さり、若干痛い、無視して更に力を加える。

その表情は強張った笑顔と額に浮き出た青筋で中々の迫力がある。

「……それ以上続けると全身の入れ墨をベタ塗り並みに多くしちゃおうが、それでもオツケー？」

「い、いはあい！ひやめてひやめてえー！ひれふみひやだあつ！！ひよくばふはひやあああああんっ！！」

涙目になって引つ張られたまま許しを請うが、唇が上手く動かず呂律が回らない。引き剥がそうとする腕力は流石に強いが、痛みで全力は出せてないらしい。

外見とは正反対の情けない反応に、お仕置きを続けながらも脱力してしまう。

溜息を付きながら肩を落とし、頬肉を千切る様にして指を離す。若干短い悲鳴が聞こえた気がしたが、一々気にしない。

「……と言うか、本当にどうすんだよコレ。チケットの払い戻しするにしても買う目処が立ちやしねえ」